

(別紙2)

## 審査結果の要旨

氏名 丸山 空大

丸山氏の論文は、フランツ・ローゼンツヴァイク（1886－1929）のユダヤ教理解、宗教理解を、とくにその前期思想に焦点を当てて詳細に検討したものである。「前期」とは、主著とされる『救済の星』（1921年刊行）を書き上げる時期までを言う。したがって同論文は、『救済の星』が生まれてくる土壌を探る試みであり、それによって、多様な読解がなされてきた同書の著作意図や論旨の理解、また評価に対して、新たな知見を加えて一定の修正を示唆するものとなっている。とともに、同書執筆以前からローゼンツヴァイクが抱いていた多様な関心や思索がすべてこの著作に盛り込まれているわけではないことが明らかにされ、それが、ユダヤ教教育の実践や個人の罪や救済の問題といった、「後期」ローゼンツヴァイク思想の主要関心に繋がっていくことが見定められる。ローゼンツヴァイクの哲学は『救済の星』を以て完成したわけではない、と見るところに丸山氏の意欲的なテーゼがある。

そのために氏がとる方法は、近年公開、刊行が著しく進んでいるローゼンツヴァイクの膨大な書翰や日記類を最初期のものから精細に読み込んで、青年期からの思想形成の経緯や実態を、当時の思想状況や具体的交友関係の中に置き入れて跡づけていくというものである。これは新たな段階に入りつつあるローゼンツヴァイク研究の世界的水準に応じたものでもあり、その入念な作業が本論文の大きな特長をなしている。

論文の構成は、前期思想に着目することの意義とその方法、先行研究や資料状況など、本論を展開する前提を整理した序論に続いて、第1部「回心前夜」、第2部「改宗をめぐる一連の出来事の意義」、第3部「啓示とは何か」の三部、全12章からなる。部題が示すように、ローゼンツヴァイクが27才のとき、いったんキリスト教への改宗を決意して撤回した劇的な出来事が、彼の心境の上でいかなる経路で生じ、また思想形成上どのような意義をもつのかを精査解明していく部分が本論文の一つの中心をなす。それは青年期のローゼンツヴァイクの思想的伝記をなすに留まらず、彼のユダヤ教理解、キリスト教理解、ひいては宗教理解の形成と変貌、深化の理路を解明することであり、これを踏まえて第3部で、ローゼンツヴァイク哲学の中核概念といえる「啓示」について、「対話」、「証言」、「生」といった重要概念と関連させながらその内実を明らかにする作業がなされる。

丸山氏が取り出して見せたローゼンツヴァイクの「前期」思想が、『救済の星』自体にどう結実しているのかをこの主著の論述に即して跡づける作業、また「後期」の思想展開にどのように連なっていくのかの検討は、なお課題として残る。しかし氏がそうした作業に向けて研究を推進していく基盤が本論文において得られていることも確かである。以上の評価にもとづき、審査委員会は本論文を博士（文学）の学位授与に価するものと判断する。